

和歌山県太地町のいるか追い込み漁業における捕殺方法の改善  
 岩崎俊秀<sup>1</sup>, 貝 良文<sup>2</sup>(水産総合研究センター遠洋水産研究所<sup>1</sup>, 太地町漁協<sup>2</sup>)

【目的】太地のいるか追い込み漁業においては槍型の器具を投じて食用捕殺していた(以下、従来法)。しかしフェロー諸島で行われている頸髄及び頸椎周囲の血管叢を切断する方法(以下、脊髄切断法:Olsen (1999))は捕殺時間が短く、作業者の安全性も高いと考えられた。ここでは後者の導入結果を報告する。



図1 現在使用中の捕殺ナイフと楔(ナイフに結んだ浮きは水中に落とした際の目印)。

【材料と方法】2000年12月～2001年2月にハナゴンドウ9個体、スジイルカ4個体、マダライルカ2個体、及びマゴンドウ1個体に対して脊髄切断法を適用した。対照として従来法によるスジイルカ1個体の捕殺時間を記録した。致死の判定基準は、作業者の便宜から運動と呼吸の停止とした。2008年12月にはスジイルカへの完全適用を試みた。2009年12月には切断創に楔を打ち込み、放血の制御を試みた。

【結果】脊髄切断法により捕殺時間を短縮できた。

表1 捕殺に要した時間

種名	捕殺方法	例数	捕殺時間(秒)		
			最短	最長	平均
ハナゴンドウ	脊髄切断	9	5	40	13.7
スジイルカ	槍+脊髄切断	4	5	30	17.5
スジイルカ	従来法	1	300	300	300.0
マダライルカ	脊髄切断	2	8	10	9.0
マゴンドウ	脊髄切断	1	25	25	25.0



図2 脊髄切断の作業

刃は先端にしかないので切断創は極めて小さい。

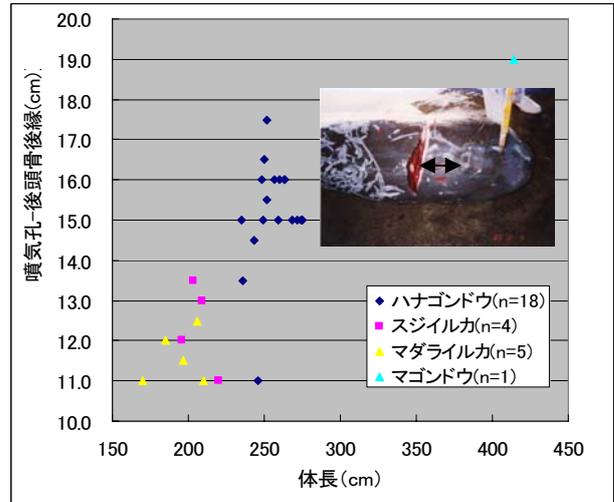


図3 脊髄切断位置と体長の関係。

握り拳の幅を凡そ10cmとすると、図3よりスジイルカ及びマダライルカは噴気孔の後方握り拳幅1個、ハナゴンドウは同じく1個半、大型のマゴンドウは同2個を目安に切断するのが適切と考えられた。



図4 座礁の防止(左)と楔による放血の制御(右)

座礁しやすい岩場をビニルシートで覆った結果、捕殺場所へのスジイルカの誘導が容易となった。これによって脊髄切断を本種にも完全適用できた。また、切断創に楔を打ち込むことによって体外への出血を制御できた。放血は捕殺10-30分後の内臓摘出時に行うが、官能試験では肉質の低下は見られなかった。

【考察】

- ・捕殺時間を短縮でき、作業者の安全性も向上した。
- ・楔による放血制御は、海面の血液による汚染防止や血液の工業的利活用の可能性を拓いた。
- ・脊髄切断法の開発者は楔による血液の体内保持は致死を遅くする恐れがあると指摘している。今後フェローと同じ指標(散瞳)で致死時間を再検討する必要はあろう。

【文献】

Olsen, J. (1999) Killing methods and equipment in the Faroese pilot whale hunt. *North Atlantic Marine Mammal Commission, report to the working group meeting in hunting methods: NAMMCO/99/WS-2: 1-14.*